

徳富蘇峰記念館

目録 (2)

遺墨展 (昭和56年1月16日)

ケース番号21

○徳富蘇峰 (文久三年|昭和三十三年)

揮毫紙本軸装 172cm × 94cm 234cm × 112cm

堂々錦旗壓関東、百万死生談笑中、群小不知天下計、千秋相對兩英雄。昭和庚辰十月念四、於岳麓雙宜莊、干時冷雨蕭條、庭前紅葉和點滴撲窓、老蘇七十八

詩意 東征を目指す官軍の旗は関東を圧するに至った。江戸を戦禍から救うため、幕府の勝海舟と、官軍の西郷隆盛は相対して談笑し、江戸平和開城の約を成立させた。俗人は知らずこれを歴史に残る天下の大計であった。

○徳富蘇峰

揮毫紙本軸装 130cm × 68cm 200cm × 86cm

黒潮の誘ふ南風に、我衣吹せて立つや、佐多能大碑 緑家弟蘆花作 蘇峰九十三ケース番号22

○横井小楠 (文化六年|明治二年)

揮毫紙本軸装 100cm × 27cm 176cm × 37cm

江戸時代末期の洋学者、政治家、思想家、肥後熊本の藩士。海外の事情に明るく、兵制武器の研究を行った。維新

後新政府に参与。その開化思想は保守派のきらい所となり、京都で暗殺された。

人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。

詩意 現今人心は安定を欠き、道徳心も薄れているが、人間として大切なことは中庸を守るといふことだけである。

○勝海舟 (文政六年|明治三十二年)

紙本軸装

江戸時代末期、明治時代初期の政治家。江戸の旗本の家に生れた。一八六〇年遣米使節として威臨丸の艦長として、日本人の手で最初の大平洋横断をした。王政復古後政府の東征軍に對して旧幕府軍を恭順にみちびき、西郷隆盛と協定して、江戸城を無血の状態に明けわたした。

年々億萬慮。總是盲想。於下其盲。以精神措其足心。是氣血循環之清涼法也。辛卯晚秋 海舟禪師

明治二十四年二十九歳の蘇峰が大病に罹った時、六十九歳の勝先生が「よししよし俺が治してやる。それは当人が若気の至りであまり国事を憂へ、余計な心配をするからである。それでその頭の熱を足の踵まで引下ぐればきつと治るに相違ない。また邪氣を払ふにはこれに限る」と一包の硫黄と共にこの幅を与えた。

○新島襄 (天保十四年|明治二十三年)

紙本軸装 105cm × 43cm 191cm × 52cm

明治時代の教育家、宗教学家、安中藩士の子。同志社の創立者。キリスト教主義の学校を開いて、子弟に強い影響を与えた。

真理似寒梅 敢侵風雪開 新島襄。

蘇峰新島先生の書に題す。

眞理似寒梅 敢侵風雪開 人生精進業 眞理似寒梅 敢侵風雪開 人生精進業 眞理似寒梅 敢侵風雪開 人生精進業 眞理似寒梅 敢侵風雪開 人生精進業

○徳富一敬 (文政五年|大正三年)

揮毫紙本軸装 138cm × 30cm 225cm × 46cm

蘇峰の父。号淇水。横井小楠の門弟。蘇峰はその一生の中で多くの人に感化を受けたが、中でも、横井小楠・勝海舟・新島襄・父淇水翁を四恩と称し、四恩堂を建てて四恩人を記念したいと述べている。小楠には会った事もなかったが、淇水を通して家中が小楠を敬愛している中で蘇峰は成長した。新島先生とは明治九年の末から二十三年の初までの十三年間、海舟とは明治二十一年頃から三十二年までの十二年間、親しく教えを乞うた。小楠からは時の流れに側した客観的物の見方を、新島からは「大人とならんと欲すれば、大人」と思うなかれ」と言う謙虚な無限の愛を、海舟からは活きた世界を処して行く「人間学」を、淇水からは絶対的信頼の力強さを学んだのである。

ケース番号20

○藤田東湖 (文化三年|安政二年)

紙本軸装 歌の幅

幕末の勳皇家。水戸藩士幽谷の子。「弘道館記述義」を著し、尊皇報國の大義を分明にした。水戸学の思想を代表するもの。

○佐久間象山 (文化八年|元治元年)

紙本軸装 20cm × 33cm 106cm × 40cm

江戸末期の洋学者で開國論者。信州の松代藩士。一八二三年十三歳で朱子学を学ぶ。門弟に勝海舟・吉田松陰・坂本竜馬等が集る。一八六四年幕府に登用されたが、京都で攘夷派に暗殺された。

得。酒侯書因以詩寄。長簡示流語。還銘願遇深。論風歎路阻。仰月恨空陰。陳謝退榻。緩争暫閃金。萬言難亮意。意亮在知音。佐久間啓具。

大意 酒侯の書翰に詩を寄せる。酒侯の長い手紙は、酒侯の起居を伝え、私に對する酒侯の情の深さを身に泌みて感じる。酒侯は風が強く私の下へ来られぬと歎じ、空が曇っているの

で、月を鏡にして、心を通わすことができぬと恨んでいる。私事についてのご心配は誠に有難い。言葉を書いても、私の酒侯への真心は明らかにできないけれども、酒侯の私に對する明らか

なことは、私をよく知っていてくれることである。

○元田永孚 (文政一年|明治二十四年)

和歌 紙本軸装

漢学者、熊本県の人、細川護久の侍講を経て、明治天皇の侍講となり、教育勅語の草案に参与。君が代は千代に千代に天てらす 月日と

ともにかぎりあらじな 君につかふ身は
幾千代も、かわりなきひかりとともに
さかへ行くべき 西成歳旦 藤原永平

聞に出征した当時の述懐である「あた
まもる」の歌をば、左も予の会心の作
であるかのやうに伝へているが、自分
としては、決してさうでは無い。寧ろ
西南戦役のときに詠んだ「木留山」の
歌の方が、実際の心境に触れた歌だ。
何等彫琢を仮らずに、自然に出来た会
心の作であるかも知れぬ」と。

蘇峰贊。山県元帥自称一介武弁。蓋謙
辞也。公思慮綿密。胸中無限機畧存。
而其堅忍不撓之精神与百敗不屈之胆氣。

深藏潜蓋。天下知之者鮮矣。是国歌一
首。明治十年西征役田原坂陣中所詠。

曾所賜予。予今老矣。仍贈静峯賢契。

併記其事由。蘇叟九十一
桂 太郎 (天保四年大正二年)

紙本軸装 50 cm × 27 cm 130 cm × 41 cm

明治時代の軍人政治家。長州萩の出
身。一八七〇年ドイツに留学、兵制を研
究。一九〇一年内閣を組織、日英同盟

や日露戦争を処理した。明治時代の代
表的藩閥官僚で、政党と対立。

ケース番号 24
三舟の書

正二位伯爵勝安房先生書
紙本軸装 130 cm × 30 cm 192 cm × 44 cm

高橋伊勢守(泥舟)忍斎先生書
(天保六年明治二十六年) 右同

明治維新時代徳川氏の名臣。世に山
岡鉄舟、勝海舟と共に幕末三舟という。

明治元年慶喜が江戸城を出て上野寛永
寺に入った際は護衛に当り、終始君を
守った。

この歌は木留陣中の諷詠として、公爵
山県有朋伝(中巻 昭和八年発行、編
述者 徳富猪一郎 発行所 山県有朋
公記念事業会)に次のように説明されて
いる。有朋が「世間では、予が北越戦

。從三位勲二等子爵山岡鉄舟先生書
(天保七年明治二十八年) 右同

幕末 明治の功臣 劍槍、軍学に通曉、
劍豪千葉周作の門に入り後無刀流を創
始す。幕府の政權奉還後、官幕兩軍の
間に熱誠以て大に尽す所があった。明

治天皇侍従、皇后宮亮を歴任。その書
は雲龍奔放、一生のうち、人のために
揮毫するところ幾百万なるを知らずと
伝へられる。

西郷南洲翁の外套
外套毛皮裏付黒色。鹿兒島博物館に出
品された時の証明書付。それによると

「西郷南洲翁の着用されしものにして、
明治十年西南戦争中南洲翁より刃見十
郎太郎氏に給はりしもの」となってい
る。この外套は蘇峰が鹿兒島のみやげ
に友人茂木育造より貰い、それを昭和
二十九年十一月、蘇峰より塩崎彦市に
贈られた。蘇峰の添書によると「刃見
家旧蔵ニシテ、曾テ鹿兒島博物館に出
品シタルモノト承候。其ノ製造モ明治
十年以前ノモノニ相違ナク、老生モ
之ヲ著用シ岡田紅陽君ニヨリテ撮影セ
ラレタル因縁有之ルモノニ付、貴邸ニ
御保存下被度候小生本懐不遇之ト存申
上候。先ハ老生微忱ヲ表度候。艸々不
一」とある。写真二葉も添えられてい
る。

ケース番号 19
吉田松陰 (天保一年安政六年)

紙本色紙 215 cm × 195 cm

幕末の志士にして教育家。長州藩士。
五一年江戸に出て佐久間象山に師事す

る。国事を憂えるあまり脱藩、罰を受
けた。五四年ペリーが下田に再来する
と、海外密航を企て米艦に乗りこんだ
が拒否され自首した。その後郷里で
「松下村塾」を開いて熱心に子弟を教
育。高杉晋作・久坂玄瑞・木戸孝允・
伊藤博文・山県有朋など、すぐれた門
下生を育成した。幕府の条約締結に反
対、安政の大獄によって処刑された。時
に三十歳。松陰は終生娶らず、一身を
以て国事に殉じたものであって、「留
魂録」を草し、国事を同志の士に付託
した。

三餘説
昔董遇謂、讀書當以三餘、冬者歲之餘、
夜者日之餘、陰雨者時之餘。然歲之有冬、
日之有夜、時之有雨、皆天道之常。未足以
為餘也。吾入獄來、亦得三餘、以讀書。謂
己失義於忠孝義。尚仰食於家國。非是
「是非」君父之餘恩邪。己幽身於陰房。
尚取照於戶隙。非是「是非」日月之餘
光邪。性已狂悖。多犯大典。質又孱弱。
教羅「羅」篤疾。有一千此。皆足以殺
身。而方且仰餘恩、取餘光。非是「是
非」人生之餘命邪。凡此三餘者、皆董
遇之所無而吾獨得之。雖投身足矣。抑
董遇或為農、或為官、徒得其三餘。猶
足以傳於天下後世。况吾得我三餘、寧
可量哉。松陰生稿

大意・昔董遇(三國魏の学者、読書百
遍意自づから通ずと言ったもの人)
が、読書は三つの余暇にすべきだとい
っている。冬・夜・雨の日と。しかし

この余暇は天道の常であり、これは余

暇は天道の常であり、これは余

暇は天道の常であり、これは余

暇は天道の常であり、これは余

暇は天道の常であり、これは余

暇は天道の常であり、これは余

暇は天道の常であり、これは余

暇は天道の常であり、これは余

とはいえない。私は獄に入つて私流の三余を得て読書している。それは君父の余恩と、戸隙からの日月の余光と、病身の身にある余力とである。董遇は農業をなし、官僚となりそのうえ三余を得ている。その三余が天下後世に伝わっている程、価値のあるものであるなら、余恩を仰ぎ、余光を取り、余命に読書している私の三余は、はかりしれないほどの価値のある三余ではないか。

ケース番号19

伊藤博文(天保十二年—明治四十三年) 紙本巻物書簡 28cm×95cm

明治時代の政治家。長州藩の足輕の子。吉田松陰の松下村塾に学び、幕末のころ国事に奔走した。イギリスに留学後、開国・富国強兵論にかわつた。ヨーロッパ・アメリカを視察し、西郷・木戸・大久保らの重臣の死後は政府の中心人物となつた。憲法調査のためヨーロッパに渡り、ドイツ憲法を研究して帰国。明治十八年内閣制度を作り、二十二年大日本帝国憲法を公布、翌年には帝国議會を開いた。日清戦争のち下関条約を結んだ。一九〇〇年立憲政友会を創設して自から総裁となつた。ロシアを訪れる途中ハルビンで暗殺された。

私儀昨年已来英學脩業仕候儀念願有之候に付き已に去る御在府中にも御願申出度奉存候得共未だ道理之學問とて毫髪程も出来候目途も無之尚且「且」國家御多端中御厄寄申出候事も奉恐入

候段差控能「罷」居今日に至り候得とも只今之躰ニ而碌々能「罷」居候とても往々御奉公之目的も無之就而何卒御屋敷外へ能「罷」出何し之師家へなり共入込仕備業仕度奉存候に付「き」既ニ過ル八月頃桂様迄御願申出御政府御役人様方迄御入候得とも所金「詮」君候様御留守ニ而ハ御運び難相成との御事故推而御願も不申出今以打捨「テ」置候得とも是切リニ仕置候而ハ素志も難被仕逐千萬遺憾ニ奉打過候間何卒御多端中奉恐怖候得とも可相成儀に御座候得ば於御國之御詮儀「議」被仰付候而先年長崎「崎」表へ地方但太郎其外備業として被相越來候先例も有之候事に付偏ニ御詮儀「議」被仰付候へば至願之程も逐度奉存候閣下御慈悲ヲ以御政府御役人中様方被仰入不及高大之望願御逐げさせ被仰下候様奉願上候然「る」上は益々精神相屬し往々御奉公之目的も相立度奉存候當今萬事御多端之折柄斯の御厄害申出候事も奉恐入候得とも偏ニ御願申出候段御差免被仰付候様奉願上候事

山下新兵衛組 利輔 花押
十二月十七日 来原様 奉呈執事閣下
この書簡は小松緑編「伊藤公全集」第一巻(東京昭和出版 昭和三年八月) 112~114頁に収められている。今若干の訂正を加えた。明治四十五年付の古谷久綱氏の鑑定文意付き。それによると、博文公の安政五年冬(公十八歳)江戸より在長州に恩師来原良藏の許へ送った公の真筆、其の篤学進取の氣象に富

んだ公の人格を見るには好個の遺墨であると記されている。
ケース番号23
貝原益軒(寛永七年—正徳四年) 紙本軸装 56cm×58cm 175cm×715cm
江戸時代前期の儒者。筑前の黒田藩士の子。儒学・医学・本草学など広い範囲の學問に通じ、それをだれにでもわかる言葉で書いて、後の世まで大きな影響を与えた。著書に「益軒十訓」
「養生訓」などがある。
迴文詩
白隠慧鶴(貞享二年—明和五年) 紙本軸装 69cm×24.5cm 140cm×32cm
徳川時代における臨濟禪の復興者
白隠禪師真跡布袋の図
乾隆帝(一七二一年—一七九九年) 紙本軸装 63cm×31cm 140cm×47cm
中国清朝の第六代の皇帝。雍正帝の第四子で清朝の最盛期をつくりあげた。二十五歳で即位し、在位六十年。外に對しては朝鮮・アンナン・ビルマ・シヤムまで遠征、広大な地域がその支配下にあった。内政ではその富強を背景にして文化事業に力を入れ「四庫全書」「大清一統志」をはじめ諸種の編修事業をおこし、その治世に中国の社会・経済・文化はすばらしい発展をとげた。
乾隆御筆
蓋張徵玉露、衣振拂金風、飛韻涼雲表、揚旖塞浦中、何當仲秋月、翻看十分紅、台訝思仙上、淮南見八公、晚荷一首
甲申仲秋御筆 乾隆宸翰
この詩は乾隆帝の詩を集めた御製詩

三集卷四十二に収められている。古今体百十五首の乾隆二十九年の作の第八番目に当る。乾隆五十三歳の時の作。前半に池に生えている蓮の実景を詠じ、それから連想される蓮の花の紅の色彩と仙人のような趣と、漢の淮安王劉安が八人の優れた文人を友としていたことを想起している。文化的雰圍氣を詠じている。
本居宣長(享保十五年—享和一年) たんざく紙本軸装 36.5cm×6cm 151cm×26cm
江戸時代中期の国学者。伊勢の国松坂の人。京都に上り医学・儒を学ぶ。賀茂真淵の弟子となり「古事記」の研究を志した。三十五年間の苦心の末「古事記伝」四十四巻を完成した。わが國の古代文化の研究の上に、大きな業績を残した。
歌一首。
歌一首。
林 子平(元文三年—寛政五年) 紙本軸装 90cm×29cm 140cm×39cm
江戸時代中期の海防論者。寛政の三奇人のひとり。号は六無済。歴史や地理を勉強し、各地を旅行し、新井白石・蒲生君平・工藤平助らと交遊。「三函通覽図説」「海国兵談」をあらわし、凶面海にかこまれていた日本は、海防が目下の急務であることを力説した。しかし時の老中松平定信から、人心をまどわすものとして捕えられ、木版・製本とも没収され、身は禁固となり、六意のうち二に没した。

二函竹
二函愛玉枝々勤。苦砌鳴琴葉々忙。青

土由来如有意。度天剩供十分凉。風竹
詩意。まどを吹きぬける風は、玉をう
ちならすように枝々を動かし、苔むし
た軒下の石だたみに葉が琴の音のよう
に鳴っている。緑の大地は物は言わな
いけれど、我等を滋しんでくれる意志
があるようだ。その何よりの証拠には
自然は十分の涼をあまるほど供して
くれるではないか。

。ケース番号21

朝鮮名流雅集帖

布本巻物 55 cm × 600 cm 乾・坤・

定子朝鮮来往之際、朝鮮能名士会宴、

雅集筆録也。昭和六稔三月十日装池以

晒後人 蘇峰老人 六十又九

あとがき

明治維新前後から明治の時代に活躍
した方々の遺墨を中心に展示をしまし
た。佐久間象山―吉田松陰―伊藤博文
・山県有朋・勝海舟―徳富蘇峰等人脈
のつながりが、各方面から延びて行き、
つながって行く事を感じます。一人一
人各自の信念の下に、明治の時代に生
涯をかけた方々の遺墨は、墨跡自体が
さまざまな歴史を語っているように思
います。

解説できていない遺墨は、ごらんにな
る皆様方のお力をお借りし、より正
確な目録にして行きたいと思えます。
尚この他に蘇峰の母久子・妻静子・弟
健次郎・その妻愛子・伯母矢嶋揖子・
大谷光瑞・九条武子・川田順・棟方志
功等の遺墨も展示されています。